

あんたの事ばかり云ふてるし。やつぱり偶には顔を見せて遣らんとあの妓が心配するやないか。まよわし。」

「姐貴。あの妓やなんて云ふてな。俺い甚い目に逢ふてるねで。」

「阿呆らしい。あの妓毎日遣入つて来るのん。髪を結びに行たと云ふては寄り、お詣りしたと云ふては寄り。來ると貴方の事ばかり云ふて、なア姉やん。源やんもないしてるねやろ。チョツとも顔を見せへんが、どこぞ悪いのやないやろかやとか。また、あつちのんが戻つてるので焼棒杭に火が付き易い依つてに逢戻りしてるのやないやろかやとか、もう來ると惚氣ばかり聞かされ通し。貴郎が來てやつたら澤山按摩賃張り込んで貰をと云ふてるのん。エ、違ふ、ナニ耳貸せ、エ、あたいの、ハアどうぞお使ひ（耳を持って行く）エ、ハア、ハア、ナニ、ハア、イエ、エー、ハア、イエ、そら違ふ。そらそんな事を云ふてやつたらあの妓が可哀想や、そら誰ぞの調伏。ハア、あたいが請合ふ。ハア、貴郎とあの妓の中は此の廓中評判。ハア〜お〜まで知てるわ。お互に堅い物握り合ふて。」

「姐貴それが堅うないね。もう柔らかかうなつてグニヤ〜や。もう一遍耳を。」

「エ、ナニ、フン〜、ハア。エ、ハア、フウン、オ、イヤ、ノ。それ——ほんまか——。それがほんまやつたら、あたいまで一杯喰はされてゐるのやわ。ほんで貴方のお連れはん來てはるのん。」

マアてれくさ、なんでそれを先に云ふとくなアれへんね。これ。お〜やん。お連れはん來てはんねと。呼びなアれ。マアきらひ。あのお連れはん、おつれはん。」

「オイ清やん。おつねはんやと。」

「お常はんやない。おつれはんや。入れて貰ひ。」

「へエ、おばはん今晚は。お仕舞ひ。」

「馬鹿やなア。お茶屋へ來ておばはん今晚はお仕舞ひといふ奴が有るかい。」

「サア、どうぞ、お上り。」

「へエ、皆だまされ連中でおます。」

「そんな事を云ふない。」

「マア悪い奴でおますせなア。今聞いてびつくりしてまんねがな。あんたら別々においなアる依てにそんな目に逢ひまんねで。今度から皆御一緒に。こんな汚なアい内だつけども。チツトあぼしに來とくなアれ。また良えお妓を世話しまんがな……、イ、エ顔ばかりやない、腹の良えお妓を世話しますさ。」

「へエ、ほんなら又改めて欺され直しに來まつさ。」

「オイ喜イ公。そんな物云ひをしいないな。時に姐貴。チョツと彼奴呼びに遣つてんか。」